

第3章 不登校児童生徒及び保護者に関するアンケート調査

1. 調査概要

(1)調査目的

- ・ 県内の不登校児童生徒が不登校となったきっかけや、不登校期間中の支援へのアクセス状況、児童生徒及び保護者の支援ニーズを把握する。

(2)調査対象

- ・ 令和4年度（小学校1年生・中学校1年生の場合は令和5年度）に、30日以上学校を欠席した児童生徒及びその保護者。

(3)調査期間

- ・ 令和5年12月13日（水）～令和6年1月22日（月）
※1月29日（金）までに回収できた回答まで集計に含めた。

(4)調査方法

- ・ WEB アンケート調査にて実施した。

(5)回収数

- ・ 児童生徒用調査 1,753 件、保護者用調査 1,775 件

(6)留意事項

- ・ 回答は、それぞれの質問の回答者数を母数とした百分率（%）で示している。それぞれの質問の回答者数は、nと表記している。
- ・ %は小数点以下第2位を四捨五入し、小数点以下第1位までを表記している。したがって、回答の合計が必ずしも100%にならない場合がある。
- ・ 表上の数値の単位については、表中に記載がないものは%である。
- ・ 回答者が2つ以上回答することのできる質問（複数回答）については、%の合計は100%を超えることがある。
- ・ 各設問の選択肢が長い場合、選択肢を省略して記載している場合がある。
- ・ クロス集計の際、表側に来る項目（クロス軸）に無回答や「答えたくない」という回答があった場合、分析軸からは除外している。

2. 調査結果【概要】

■児童生徒用調査

(1)回答者について

児童生徒の回答者は、小学生が 41.5%、中学生が 57.0%であった。また、令和 5 年 11 月の状況として、「毎日学校を休んでいる」「ほとんど学校を休んでいる」人の合計割合が 53.3%と、回答者の半数を超えている。令和 4 年度に学校を休んだ日数も、「180 日より多い」の割合が最も高く 35.7%であった。

(2)学校を休み始めた時期

最初に学校に行きたくないと思った時期は、小学生で「小学 1 年生」、中学生で「中学 1 年生」という回答割合が相対的に高く、入学初期から学校への抵抗感を持ち始める児童生徒が多いことが分かった。このうち 3 割程度は、実際に学校を休み始めるまでしばらく登校を続けていたという結果となっている。さらにそのうち 1 割程度は、1 年以上登校を続けている。また、中学生においては、小学生のころから継続して不登校状態であるという者も多い。

最初に学校に行きたくないと思ってから実際に学校を休み始めるまでに、保健室登校や別室登校を行っていた割合は高くない。どこにも行っていなかった割合が 58.7%で半数を超えており、行き渋り期・不登校初期の居場所が十分でない様子が伺える。

(3)学校に行きたくないと思ったきっかけ

学校に行きたくないと思ったきっかけについて、「先生のことによって気になることがあった（先生が好きではなかった、怖かった）」という割合が 27.9%、「勉強が分からない、授業についていけなかった」という割合が 24.9%で高くなっている。

学校種別にみると、中学生では「友達のことによって気になることがあった」という割合も同程度に高い。また、中学生では「朝起きようと思っても起きられなかった（44.7%）」や「体がきつかった（頭痛、腹痛、吐き気がするなど）（44.1%）」など、体調面の不調を抱えていた割合も高い。

一方で、小学生・中学生ともに「自分でもよく分からない」と回答する者も 4 割弱存在している点にも着目しうる。

(4)自分の気持ちを相談できたか

学校に行きたくない、休みたい気持ちを相談できたかについて、誰にも相談できなかったという割合は小学生で 14.7%、中学生で 24.9%と中学生の方が高い。また、同様に中学生においてはそのような気持ちを「相談しにくい」と思ったことのある割合が 68.6%であり、小学生の 52.4%と比較しても大幅に高くなっている。その理由として、「学校には行かないといけなかったから」「だれも自分の気持ちを分かってくれないと思ったから」「周りに心配をかけると思ったから」の選択肢の回答割合が高く、プレッシャーや孤独感を感じている様子が伺える。

(5)学校を休んでいる間の暮らしについて

学校を休んでいる間の過ごし方について、「ゆっくりしている (89.9%)」と「Youtube や Tiktok など動画を見る (85.6%)」の割合が特に高かった。学校種別でも違いがあり、小学生では「外に出かける」「家で勉強する」、中学生では「学校の友達と連絡する」「X (Twitter) や SNS を見る」の割合が相対的に高い。

休んでいる間の学習の仕方としては、半数程度が「学校の教科書やプリントを使う」と回答しているが、中学生では「YouTube などの無料の動画を見る」の割合も相対的に高くなっている。なお、小中学生とも学校のタブレットを使っていた割合は2～3割に留まっている。休んでいる間のオンラインの活用について、「通っていたクラスの授業にオンラインで参加する」ことへのニーズが3割程度ある一方で、特に中学生においては「知らない先生の授業の動画 (自分のペースでやめられる)」へのニーズも同じ程度あり、学校とは離れて学びたいという気持ちを抱く生徒も一定数いることが分かる。

(6)学校を休んでいるときの気持ち

学校を休んでいる間の気持ちについて、「ほっとする楽な気持ち」「自由な時間でうれしい」という回答割合が高い (全体で7割前後) 一方で、特に中学生において、同程度あるいはそれ以上に「勉強が心配、気になる」「将来が心配、気になる」という回答がある (小学生においてはそこまで高くない)。また、中学生においては「自分のことが好きじゃない」「学校の友達が自分のことをどう思っているのか気になる」の回答割合も高く、大きな不安感を抱くとともに自己肯定感の低下につながっている様子が伺える。

(7)学校を休んでいる間の支援

学校を休んでいる間にあった・行ったとして、最も割合の高かったものが「学校の先生が電話をしてきた」で、87.0%であった。そのほか、「病院へ行った」という割合も55.0%と半数を超えた。加えて、あった・行ったことへの評価 (あってよかったか・行ってよかったか) を尋ねたところ、評価が高かったものは、「病院へ行った (54.2%)」「保健室や、学校の相談室に行った (49.6%)」「習い事へ行った (47.9%)」であった。

学校を休んでいる間に話した人については、「お母さん」の割合が圧倒的に高く 88.8%であり、次いで、「学校の先生 (68.4%)」、であった。話せて (話せたら) 良かったと思う人については、「お母さん (83.3%)」「お父さん (65.1%)」「おじいちゃん・おばあちゃん (59.0%)」と、家族の割合が高くなっている。

(8)支援や環境に対するニーズ

今、どんな場所なら行きたいと思うかについて、「何時に行ってもいい (遅刻、早退をしてもいい場所) (60.6%)」や「ゆっくり休めるスペース・場所がある (57.4%)」などの回答割合が高くなっており、自分のペースで勉強したり、過ごしたりできる居場所へのニーズが伺える。また、学校種別にみると、小学生では「友達といっぱい遊べる」、中学生

では「一人きりになれるスペース・場所がある」の回答割合が相対的に高い点も特徴的である。

また、悩みを相談したい人としては、小学生では「一緒に遊ぶ人」と「ほっと安心できる人」が同程度、中学生では「ほっと安心できる人」の回答割合が高い。相談する方法としては、小学生では「会って話す」と「LINE やメールで話す」が同程度、中学生では「LINE やメールで話す」の回答割合が高くなった。

■保護者用調査

(1)回答者について

保護者の回答者は、母が 89.6%、父が 9.2%、祖父・祖母が 0.5%であった。また、回答対象となる子供が小学生の割合が 41.9%、中学生の割合が 57.3%である。

(2)子供の不登校の状況

子供が令和4年度に学校を休んだ日数は、「180日より多い」の割合が 45.3%と、ほとんど学校を休んでいる割合が半数近くを占めている。

保護者から見た子供の不登校のきっかけについて、全体では「身体の不調（学校に行こうとするとおなかが痛くなったなど）（39.5%）」「先生との関係（先生と合わなかった、先生が怖かった、体罰があったなど）（32.7%）」の回答割合が高くなっている。ただし、学校種別にみると、中学生に特徴的な理由として、「部活動の問題」「生活リズムの乱れ」などで相対的に回答割合が高い点に着目できる。

学校を休んでいるときの子供の様子について、全体としては「インターネットやゲームを一日中していた（73.9%）」「落ち込んだり悩んだりしていた（71.0%）」「外出が少なく他人との関わりが少なかった（69.1%）」の回答割合が高い。1つ目、3つ目は特に中学生において高く、中学生では他にも「インターネットやゲームを一日中していた」「生活リズムが整っていなかった」の回答割合も高くなっている。

(3)子供との関わり方

子供との関わり方については、「子供の気持ちを理解するよう努力した（95.8%）」「日常会話や外出など、子供との普段の接触を増やした（82.2%）」と子供に寄り添い、コミュニケーションに努める様子が伺えると同時に、「子供の進路や将来について不安が大きかった（80.4%）」と不安感を抱いている保護者が非常に多いことが分かる。

子供との過ごし方については、生活リズムが乱れないようにする働きかけを行ったという割合が高く、そのほか外出や家の手伝いをするよう促したという保護者も半数程度にのぼった。一方で、登校を頻繁に促したという保護者の割合は高くなく（3割程度）、「学校に登校するかどうかは子供の意思を尊重した」という回答が 95%以上とほとんどであった。

今保護者が困っていること、不安に思っていることとしては、「勉強・学力（68.8%）」「進路・将来（59.7%）」の割合が高い。必ずしも学校復帰は目指さないものの、前述したように勉強や将来についての不安感を抱いている様子が伺える。

(4)相談、支援の状況について

子供が学校を休んでいる間にあった・行ったことについて、肯定的な評価がされているものとしては、「学校の先生からの電話などの連絡（75.2%）」「学校の先生・保健室の先生との相談（67.4%）」が上位となっており、児童生徒の評価とはやや異なる結果となった（児童生徒は、病院に行ったことや保健室・相談室に行ったこと、習い事に行ったことを高く評価）。

学校を休んでいる間に何らかの支援機関を利用した割合について、最も高いものでも「適応指導教室・教育支援センターへ通所」で30%弱と、7割超の家庭では支援機関につながっていない状況が伺える。民間施設によるオンラインを活用した学習支援については「知らなくて使用しなかった」の割合が高いが、「民間施設（フリースクール等）へ通所」については、「知っていたが利用しなかった」の割合が高い。

支援機関を知っていたが利用しなかった理由として、全体としては「子供が嫌がったから」が67.6%と高い割合になっている。学校種別にみると、小学生において「自宅が遠かったから（近くなかったから）」「家族が送迎しなければならなかったから」などの回答割合が相対的に高くなるものもあり、年齢によっては家族のサポートが無ければ支援につながりにくい状況も分かる。

なお、学校を休むようになってから支援機関を利用するまでの期間として、1か月以内も18.7%である一方、1年超の割合が17.3%と、長期間支援につながるできていない家庭も2割弱存在している。

支援機関を利用したきっかけは、「学校からの情報提供（43.0%）」「インターネット・SNS（27.6%）」の割合が高い。もっと早く支援機関につながるためのニーズとして、学校からの一層の情報提供を求める割合が最も高く7割強にのぼるが、行政からの情報提供や、保護者同士で情報交換のできる場所へのニーズも確認できた。

(5)ICT 環境・活用状況

自宅にインターネット環境がある家庭が99.0%であるが、学校を休んでいる間に一人一台端末を活用した割合は6割弱にとどまった。

オンラインの活用へのニーズとしては、学校の授業へのオンライン参加（37.7%）よりも、学校とは関係なく、子供のペースで参加できる授業のライブ配信（57.5%）、子供が好きな時に科目を選んでみられる録画授業（52.8%）へのニーズの方が大きい。

(6)必要な相談、支援等

学校を休んでいる間に、子供をどのような場所で過ごさせたいかについては、「誰かと関われる場所（74.3%）」「勉強を教えてくれる場所（62.3%）」「自由に過ごせる場所（59.5%）」の順に回答割合が高かった。子供の回答とはやや傾向が異なり、人との交流を持たせることができる場所や、勉強への支援が得られる場所を求めていることが分かる。

不登校児童生徒の支援のために必要な取組については、「市町村立の学びの多様化学校（不登校特例校）の設置（69.5%）」「県立の学びの多様化学校（不登校特例校）の設置（45.4%）」と、新たな形の学校が求められていることが分かった。そのほか、「現在の相談機関の周知」「市町村立の教育支援センターの充実」など、現状の支援策の周知・充実に関するニーズも見られる。